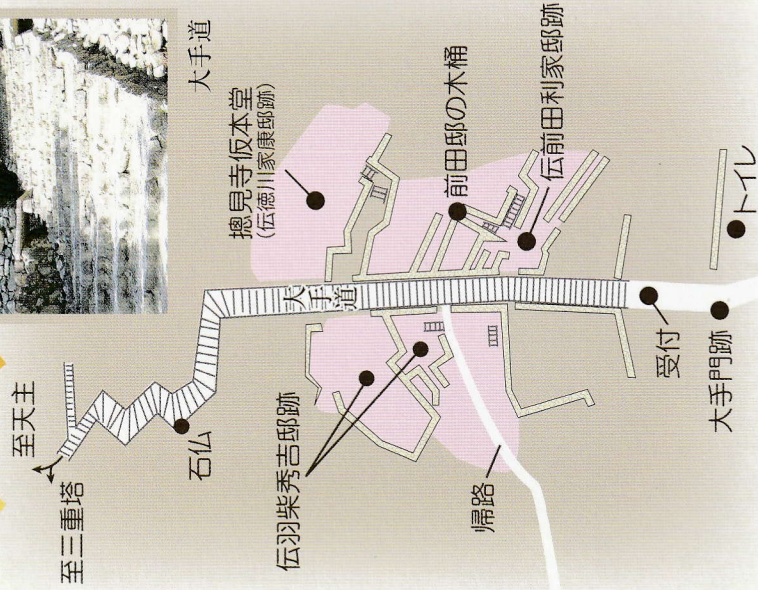
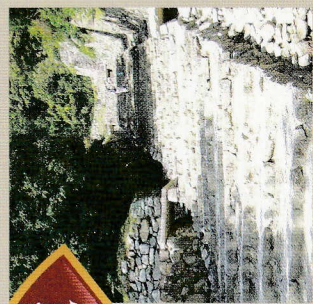


大手道周辺



梶見寺

臨濟宗妙心寺派の寺、遠景山と称す。安土城築城の際(天正四年)、信長公が他所より移築し安土城本丸の西方の峰に自らの菩提寺にしたと伝えられる。天正十年の天主崩落の際にも焼け残ったが、安政元年(1854)11月16日に火災により本堂などほとんど焼失。今は礎石のみが三重塔の北に残っている。その後、昭和七年(1932)本堂が大手門近くの伝徳川家康邸跡に建てられ現在に至る。寺宝として信長公所用の永楽銭を散らした銀象眼が伝えられている。

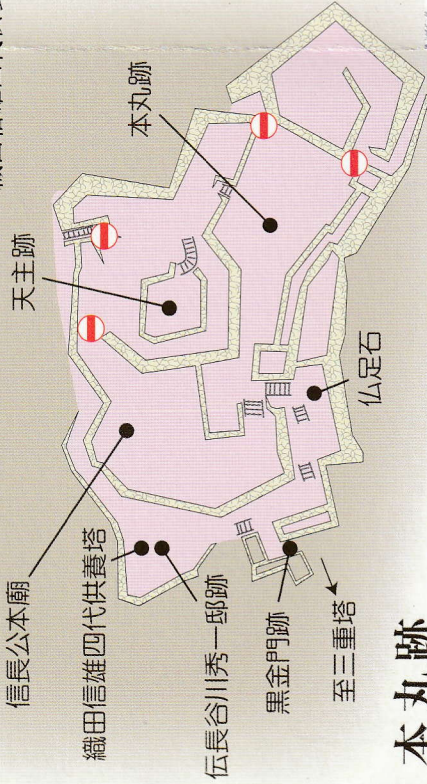
鉄鈔:天正9年4月15日特別保護工芸品に指定 重要文化財



天主跡周辺



織田信雄四代供養塔



本丸跡

安土城天主から少し降りたところにある本丸御殿跡。「信長公記」によれば、この建物には天皇を招き入れる「御幸の間」があったと記載されている。その後の調査で慶長年間に改修された京都御所内の天皇の住居である清涼殿と酷似した構造になっていたことが判明、さらに礎石上の柱痕からこの建物が高床式であったこと、周囲の伝三の丸跡や天主取付台と渡り廊下で繋がっていたことなどが明らかとなる。

信長公本廟

天主跡西下の伝二の丸跡に信長公の本廟がある。重臣、羽柴秀吉は天正十一年一月三法師に年賀を表すべく登城し、翌二月信長公ゆかりの安土城二の丸跡に太刀、烏帽子、直垂などの遺品を埋葬して本廟とした。そして、六月二日の一周忌には織田一族や家臣を集め、盛大に法要を行った。



天主跡



背丈ほどの高さの石垣に囲まれ東西、南北それぞれ約28mおきに整然と並ぶだけであるが、この部分は天主の穴蔵(地階の部分)にあたり、その上にさらに大きな天主がそびえていた。五層七階(地上6階地下1階)の天主はイエズス会の宣教師ルイス・フロイスによればヨーロッパにもあるとは思えないほどの壮大さであったといわれ、高さ33mの木造高層建築は当時、わが国で初めてのものであった。内部は信長公の御用絵師、狩野永徳の豪壮な障壁画や装飾を配していた。

三重塔周辺



三重塔

山の中腹に見える三重塔は三間三重の塔で屋根は本瓦葺き。室町時代の建物で棟柱に、享徳三年(1454)建立、天文二十四年に信長公が甲賀の長寿寺(湖南市)から移建したものとされている。慶長九年(1604)豊臣秀吉の次男、秀頼が一部修理している。大正三年九月、突然三層目の屋根と一・二層の軒が崩落したがすぐ修復された。

【三重塔】明治34年3月27日 特別保護建造物に指定 重要文化財

二王門 (楼門)

棟木に元亀二年(1571)七月甲賀武士山中俊好建立とある。屋根は入母屋造り、本瓦葺き。門内に安置されている金剛力士像も門向様国指定重要文化財で頭部の内側に応仁元年(1467)因幡院朝作の造像銘が残っており、信長公が天正年間に甲賀から移した。

【楼門】明治36年4月15日 特別保護建造物に指定 重要文化財
【木造金剛力士立像】明治44年 特別保護彫刻に指定 重要文化財

